

## 第二次大戦中の日本技術論における地域特殊性の導 出の理路：山田坂仁と相川春喜の場合

金山, 浩司  
九州大学基幹教育院/共創学部: 准教授

<https://doi.org/10.15017/4150378>

---

出版情報：哲学論文集. 56, pp.1-17, 2020-12-15. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

## 第二次大戦中の日本技術論における地域特殊性の導出の理路

——山田坂仁と相川春喜の場合

金 山 浩 司

### はじめに——日本技術論の見直しのために

科学や技術は普遍的なものであり、世界のいずこでも同様の方法が用いられ同様の目的が追求され、同様の手法により評価選別される——これが常識の見解だとすれば、それに対して、通常そう思われているこれらの領域の営為もまた、文化的社会的に規定されるものであり、普遍的ではないという立場もあり得るだろう。本稿で扱われるのは、まさに後者の、科学的そして技術的活動がもつ地域特殊性、被規定性のほうがむしろ強調されていた時期・地域の技術論である。すなわち、日中戦争を経て太平洋戦争に至るころの日本のそれである。

この時期の日本においては科学や技術の振興が国策として大いに追求され、技術者や技術官僚のみならず知識人全般の多くが、科学や技術の性質・本質に関して盛んに論陣を張った。こうした知識人としては三木清がまず思い浮かぶだろうが、一九三〇年代に唯物論研究会などで活躍していた左翼知識人たち（多くはこの時期には弾圧を経て転向していたとされる）

の技術論も、同時期、質量ともに無視できない光彩を放っている。彼らははかつて採った唯物論の立場を放棄しつつ、異なる視点からの技術の本質・あり方を検討した論考を発表し続けていた。

日本技術論論争史全般については、中村静治や嶋啓らの古典的研究があり、戦前から終戦後までの長期にわたる多様な論者が参画した論争の内容について詳細に記述されている<sup>1)</sup>。しかし、多くの技術論者たちが沈黙ないし転向したように見える一九四〇年代前半の各種技術論については、これら著作はほとんど言及していない。官憲の弾圧を経て国策におもねったかのように見える同時期の議論に対しては、これら思想史家たちは、検討に値しないとしてきたとまでは言わないにせよ、おおむね敬遠ないし黙殺の姿勢を見せてきたと言えよう。

これら思想的著作がもつ問題は、対象の制限のみならず、視点の固着ぶりにもある。中村や嶋らの研究は、一九三〇年代から戦後に至るまでの技術論の諸立場を、技術の定義づけにあたって労働手段体系説（ないし技術的生産過程における客体性の重視）をとるか客観的法則性の意識的適用説（ないし主体性の強調）をとるかにおいて二分し、この、ともにマルクス主義の流れをくむ（あるいははつきりマルクス主義者たちといつてよい）両派の対立論争を軸に描こうとする傾向が濃厚である。こうした二分法が正当なものか、ないし、技術論論争を主体性と客体性のいずれかに主眼を置く両派の対立としてとらえてよいのか、については疑問も提示されてきた。渡辺雅男の一九八〇年代の論考はこの問題に正面から取り組んだ労作であり、技術の本質規定にさいして、二分された両派の立場を止揚せんとする試みであった<sup>2)</sup>。しかし、渡辺の提唱も現在に至るまで大方の理解を得られたとはいいがたく、近年にあつても、日本技術論論争史は技術規定をめぐる右に述べた二派の（しばしば不毛な）対立としてのみ了解されている場合が多い<sup>3)</sup>。

この状況に対して、太平洋戦争期の、技術論者たちがすでにマルクス主義的概念を前面に押し出せなくなった時期の諸論考に着目することで、日本技術論に別の光を当てようとする試みも近年みられる。二〇一九年に惜しくも早世したアロン・モーア（Aaron Moore）は、一五年戦争期ひいては戦後に至るまでの、日本のテクノクラートや経済学者らが帝国運営に際し

て抱いていた技術的想像力 (Technological imaginary) を軸にして、技術論を新たな切り口から分析している<sup>4</sup>。筆者もかつて、当時代表的な技術論者でありまたモーアも一章を割いて扱っている相川春喜 (一九〇九―五三) に着目し、一九四〇年代に入ってから相川の技術論を、一九三〇年代に彼が唯物論研究会で活躍していた時期から持ち越された理論的課題を解決づける過程の上に置かれたものとみて再検討しようとしたことがある<sup>5</sup>。

本稿では、相川春喜のほか、同時期に活躍した哲学者・山田坂仁 (一九〇八―八七) の論考を取り上げ、技術的行為における主体・客体のせめぎあいなどの問題とはまた別途、技術や科学が文化・国家といかにかかわるか、技術・科学が持つ民族的特殊性などについて彼らがいかなる理路をもつて論じているかを検討していこう<sup>6</sup>。これにより、技術論に限らず、戦中日本の知識人の思想的転向について、より陰影に富んだ記述を行うための参照視座を得ていきたい。

## 一. 「日本科学」論の興隆

技術や科学が文化的に規定されている、ないし地域独特のものであるというとき、ある地域・民族の文化的性向を前提とし、活動主体の何らかの意識的志向性が科学・技術活動に影響するという議論の立て方がありうる。後述するように、これは本稿で光を当てる相川や山田とは全く別の議論である。相川・山田の論考がもつ特徴を浮き上がらすために、同時代日本にて行われていたこの種の議論をまずは瞥見しよう。

本稿で扱われる主要論考が書かれた時期は一九四〇年代だが、それ以前より、日本文化研究の振興はまずは青年間での共産主義への傾倒に対する対抗軸として、また、戦時体制に向かう日本の国策として、追求されてきた。一九三四年二月には、官民挙げて思想教育を行うことを目指す日本文化協会が文部省の主導により設立されている。

科学活動は普遍的なものであり文化的特殊性は関与しないとする観点に対抗して、こういった活動領域にも日本独自の観

念を導入するべきであると説いたのが、東京帝国大学教授であり一九三七年四月以降には一高の校長も兼任していた、そして第二次近衛内閣においては文部大臣も務めた生理学者の橋田邦彦（一八八二—一九四五）であった。橋田は、当時諸学校で行われていた日本文化講義などにおいて幾度も講演を行っており、日本の科学の代表的唱道者であったと言つてよいだろう。

橋田の考えるところの「日本科学」がいかなるものであるかについては、近年岡本拓司が綿密な紹介を行っているので詳細はそちらに譲るが、橋田は、自然科学者の仕事においても全人格が研究に織り込まれていなければならず、主観客観が一体となった「主客未分」「物心一如」の状態に至らねばならないと説いていた。

橋田の議論は技術にまでは及んでいないものの、科学活動にさいして日本独特の認識のあり方が必要である（科学は普遍的な認識方法に基づいて行われるものではない）と説く点においては、科学の普遍性を否定する議論となっている。こうした認識方法における主観と客観の統一が目指されているわけだが、後述するように技術過程の中に同様の統一をみる相川らの技術論とは、一見したところ共通点があるようにも見える。しかし結論をやや先取りして言うならば、相川ら技術論者が生産過程の中にそうした止揚をみてとつたのに対し、科学活動を行う者の精神のあり方としての統一的认识の重要性が説かれる点は、大いに異なっている。つまり、橋田にあつては、文化により規定されるのは科学活動にあたる主体の精神的側面であり、科学や技術の営為自体ではない。

橋田のような科学論のほか、作田莊一（一八七八—一九七三）の「国民科学」論もまた、日本科学論の一系譜とみなされようが、作田の言う国民科学は通常の自然科学や技術を念頭に置いたものではないため、本稿では論じない<sup>8)</sup>。日本科学論についてはひとまず以上をもって措くこととする。

## 二一 対抗理論——山田の場合

こうした「日本科学」の観点に対して、次に、戦前から戦後にかけて活躍した哲学者の山田坂仁が戦時中に著した科学の民族性に関連した論考を取り上げよう。山田は本稿のもう一人の主人公である相川春喜と同世代の一九〇八年生まれであり、松本の高等学校を卒業後、一九三三年に東京帝国大学文学部の哲学科を出、戦時中には中学校の教諭や新聞社社員を転々としていた。戦後は一九五五年から七九年までの長きにわたり明治大学経営学部で教鞭をとっている。一九三〇年代には「山岸辰蔵」のペンネームを用いて唯物論研究会でも活躍していた人物であり、戦後、物理学者の武谷三男（一九一一—二〇〇〇）に対する批判を皮切りに、マルクス主義的立場からの技術論を一貫して旺盛に展開していった。

従来、戦時中の山田は、当時の状況による言論活動それ自体の制約もあり自身の学説を展開することはできなかった、その文筆活動は翻訳活動などに限られていた、とされてきた。一九九六年に刊行された山田の論集に付録としてつけられた年譜でも、そのように記されている。<sup>9</sup>しかし実際のところは、山田は戦時中にもその前後と異なる論調でもって技術論を展開していた。彼の戦時中のそうした言論活動については、いまだ歴史的分析が及んでいない。

以下、『科学主義工業』の一九四三年第一号「科学の民族的性格」をみていこう。<sup>10</sup>これは、科学活動がいかに文化的・社会的・歴史的に規定されているかを、詳細に論じる、とまでは言わないまでも、取り上げた論考であった。山田はここで、独英米という当時の主要国における科学の発達を、社会史の視点から見ることで、各国の性格づけを行おうとしている。彼が最も評価しているのはドイツで、ここでは「事業家」と科学者が協力するという伝統があり、かの国が発展した決定的要因は「科学研究組織及びその運用方法の合理性」だったという。<sup>11</sup>イギリスについては、科学と技術の分離が印象的であり、工業部門が科学を発展させることに熱心ではなかったとされた。また、イギリスの科学は功利主義的、実利主義的であり、「個人主義の限界を出ることができなかった」ともいわれる。<sup>12</sup>アメリカについては、資金が科学部門にも多く投入されたが、広告や宣伝に力を入れ過ぎた、「金権主義の破壊性」が見られる、とされた。

山田のこの論文での主張は、端的には次の一文に表れている。「一国の科学の全体としての特質は、その国の科学の発達した歴史的事情や社会的環境によって決定されるものであって、その原因は非常に複雑であるが、しかし決して分析できないものではない」<sup>13)</sup>。論考の表題にある民族性は科学にもみられるというわけであろう。ただし山田はすぐさま、あれこれを直ちに民族の血や素質に還元するのは「浅薄な自然主義であり生物学主義」であるともしており、民族性の概念が自然主義的に解釈されないようにとの予防線も張っている。

ここで導き出されるのは日本の民族性であり、それだけ取れば民族的独自性を訴えて地域盟主とならんとした戦時中日本の国策プロバガンダに親和的であるが、歴史的事情や社会的環境によって科学の特質が左右されるとの言そのものは、山田もそれ以前に（そして戦後にも）属していたマルクス主義科学論者たちが共通して主張していた、科学の階級性の議論を引き継いだものといつてよい。自然主義・生物学主義的な還元を戒めている前述した言明も、民族性のよりどころをあくまで歴史・社会的な次元に求めたところから出てきたものであった。山田は戦後すぐの時期においても、一九三一年にソ連のマルクス主義科学史家・科学哲学者のゲッセン（ヘッセン）が発表した、ニュートン力学の成立に階級的諸利害が与えた影響に関する古典的論考を引きながら、従前のマルクス主義的立場に拠りつつ、社会経済史的条件が科学にとって本質的なものであり、科学的諸観念それ自体をも規定することを強調していた<sup>14)</sup>。同一人物の手によるきわめて対照的に見える戦中戦後の論考には、こうした被規定性の強調という点からすると、共通面があると考えられる<sup>15)</sup>。

## 二・二 対抗理論——相川の場合

続いて、相川の論考の検討に移ろう。対象はまずは、一九四二年十一月に刊行された単行本『産業技術』である。『産業技術』をまとめるにあたって、相川は自身のモチーフを「生きた産業技術の国民的性格への認識を深め、かような性格を国家的自覚にもとづいて独創し形成してゆくとのこと」であるとし、「この主体的方向と客観的諸条件を究めることに主力を注

がねばならぬ」と書いた。<sup>16</sup> 技術の「国民的性格」については、それまで刊行されてきた『現代技術論』『技術論入門』においては萌芽的・予備的考察がなされるままだったのに対し（この点は後述）、同書では具体的な産業統制のあり方とともに本格的な理論的展開がなされるに至った。

また同書本文冒頭近くでも、戦時体制下にあつては一切が「戦略化されねばならぬ」、それは技術化ということであり、科学のように文化的な性質が強いものも例外ではないとした。<sup>17</sup> 科学の持つ国民性について相川は次のように論ずる。科学の「純粹性」を信じて疑わない者でさえ、「一国の科学が全体として、国家の重要な力源であり、したがって、科学が国力であるかぎり戦略的性質を帯びざるを得ないこと」は否定できない。学問にも国籍は厳然としてあると相川は言い、「科学の世界性はむしろ科学の国民性または国家性によって制約され、規定されている」とする。なぜかといへば「科学の歴史主体が国家国民にあることは否むべからざる事実だから」だといふ。<sup>18</sup> このことは当然、科学の普遍性に留保をつけ、科学活動といえどもローカルなものでありうるし、ありえなければならぬという議論を導出するであろう。ただし、この時点では、その特殊性が本質的な「国民精神」に由来するのか、国家戦略に科学の進展ぶりが依拠するがために出てくるものなのか、まだ判然とはしない。

### 二・三 科学・技術・産業は連鎖するもの

さて、科学と産業との関係について引き続き相川は述べており、このことにより、なぜ技術のみならず科学すらも上述したようなローカルな特性をもつのかについての論を補強している。こうした、技術と科学の区別への目配りは、先に見た山田がその短い論考の中では十分に展開しえていなかったところであった。

相川はまずは、「科学もまたひろい意味での生産であり、やはり人間的作為または制作である」と規定した。また「科学するところ」という標語は科学がまさに科学的精神の自己形成であり、作る過程でなければならぬという意味であったらる

う、と、橋田を代表とする日本科学論者に——そう名指されてはいないが——言及してもいい。<sup>19)</sup>

しかし相川の引き続き議論は、科学的精神を所与のものとしてその發揮として科学活動ひいては技術的活動をとらえる方向性が持つ限界を、むしろ指摘するようなものとなっている。科学は確かに認識の所産なのではあり、「一つの生産力表現」であるとすらいえるのではあるが、それは生産における現実の生産力とは違い、「あくまで可能的な、いわゆるポテンシャルな、潜勢的なそれにすぎない」<sup>20)</sup>。相川は、生産にあたって科学的成果を橋渡しするものが技術であるという。そして技術は科学的認識の適用であるとする武谷の説を紹介しつつ、それと対比する形で自身の立場——「生産論の見地」——を強調している。つまり、技術あつてこそはじめて科学は生産に結びつくということになるし、ここでの技術は単に科学的認識の応用というわけではない。

さて相川は引き続き、産業機構・生産形態の高度な再編が戦時下にあたって求められていることに注意を向け、生産技術向上のためには科学的成果が注ぎ込まねばならないと説くのだが、ここで、そうした注ぎ込みや科学と技術の結合がどのようになされるのが問題となる。相川に言わせれば、「意識的世界においてではなく現実的な生産の場において科学と技術の関係をとらえるということは、結局、科学を生産の技術に向けてひきつけることである。科学が生産の内生産そのものに対決せられるときに、科学そのものは一つの自己否定をとりて生産要素へと転化しなければならぬ」<sup>21)</sup>「科学が技術に転化されねばならぬ」。

相川は、この科学から技術へという連鎖が可能になるための前提として、自然科学的認識自体がもつ社会的歴史的制約をもちだす。以下、自然科学と応用科学・技術等をはっきり区別してしまおうという諸々の議論に相川は対抗しようとしている。相川は次のように論じて、これらの区分はあくまで相対的なものでしかないと強調した。曰く、「ここに自然といい客観」といい実証というとき、それは既に無制約的に、無限定的に「純粹」ではありえないということを如何ともすることが出来ない。所詮科学は人間の意識につくり出す所産であり、したがって対象的自然は環境的自然であり、何等かの意味で歴史的

自然なのである」〔…〕科学が社会的歴史的な人間の所産である以上社会的歴史的制約を免れるわけにはゆかない。いいかえれば、純粹（基礎）科学といえども全体として厚生利用的目的、人間的実践的目的によって規定されざるをえないのである<sup>22)</sup>。こうした、自然科学の対象や性質そのものが持つ被社会的歴史的制約を強調することで、相川は、「純粹（基礎）」「応用」の二分法を相対化するのみならず、先述したような、科学もまた国籍を持つという議論の論拠として思われる。すなわち、ここから先は純粹な科学的認識の領域である、といった境界線を引くことはできないので、生産そして技術が抱えるような被規定性を科学も持つ、と主張したのである。

このことをさらに確認するため、先に雑誌『科学主義工業』誌上で発表され『産業技術』に収録されたこととなった論考「技術的合理化の国民的性格」を検討していこう。同論考ではまずは、生産の合理化が急務であり、東アジア全土の資源開発を行うべきである、等の主張がみられ、実際、論の運びも、いかに効率的な生産体制を確保するか、ということに主眼が置かれている。

そうした趣旨に沿う形で、技術の性質に関する記述も見られる。「一体、産業技術は具体的にはある国ある産業ある生産の技術なのであり、かかる特定の国家産業なくして産業技術が考えられるものではないから、当然のことそこに技術の国民的性格があるといわねばならぬ<sup>23)</sup>。つまり、技術の発展を産業とのかかわりから見ようとすると相川にとっては、技術は社会文化的に規定されるもの、ということになる。科学にしても同様で、技術の側から科学を見ることを相川は説いており、これは、技術と同様の「国民的」性格を科学にも付与することを導くことになる。相川は続けて「とくに科学者や『科学的』技術者のなかには、何か技術の自然科学的組成の側からの輝かしい発達に幻惑され、その西歐的に世界史的な性格から、国民的性格を考えずまた認めずに今日に至ったものもあるが、それは技術の国民的社会的側面から反省するときに、ただ可能的なポテンシャルな技術の研究面だけみて、現実的な実践面を見おとしているから不識に侵す危険なのである」と書いた<sup>24)</sup>。

ここで言われている「科学者」は当時すでに意識的適用説を提示していた武谷のことかと思われる<sup>25)</sup>。科学が普遍的な営為

であり、その応用として技術が考えられるのであれば、技術が持つ普遍性が強調されることとなるが、相川にあっては、産業から技術へ、ひいては技術から科学へというヴェクトルが着目される以上、こうした議論は当たらないということになる。このあと述べるように、相川は「転向」前の著作でもすでに自然科学ないし自然的基盤のみに技術を還元してしまうことを戒める論陣を張っていたが、その志はこの時に至るまで一貫していたと言ってよいだろう。

### 三三 相川のたどった理論的系譜

以上、著書『産業技術』における相川による技術の国民的性格なる概念の唱道を見てきたが、こうした概念が出現するまでは、当時の国策への呼応ということ以外の、内在的理論的發展があつたものとも考えられる。以下、少し時系列をさかのぼって、一九四〇年代初頭における相川の思考に至るまでの展開の跡をたどっていこう。

#### 三三―一 マルクスの正統的解釈者たらんとしていたころ——『技術論』（一九三六年）の技術規定

講座派の新進の論客として売り出していた一九三〇年代前半、相川は唯物論研究会における技術論論争においても健筆をふるうようになり、戸坂潤との論争などで知られるようになった。これらの経緯は先行研究に譲るとして、初期「転向」したとされる以前の相川技術論の集大成といふべき書『技術論』から、本稿の関心に沿う箇所を見ていこう。<sup>26</sup>

労働手段体系説の基本的定義づけを確認したところで、同書において相川は、技術が何によって規定されるかという問題を取り上げている。すなわち、「労働の対象的物財的条件たる技術そのものは、ここに一方に社会的性質をもつとともに、他方に自然的基礎をもつ。——つまり、社会的契機と自然的契機の統一の実現概念である」とされ<sup>28</sup>ううえで、外的自然が持つ法則性による規定について述べられたあと、次のように言われる。

〔…〕技術そのものは特定の発展段階において、それに特有の内的合則性に貫かれたところの、特定の発展形態を実現するであろう。併し、此の点、技術は、社会の物質的生産力の一要素であつて、つねに、かかる要素として、生産力発展の一契機として、それに内属し、規定せられて、発展するということこそ、重要である。<sup>29)</sup>

複数の引用を経て、相川は次のように結論づけた。労働過程というのは「人間が自然に対して働きかける過程である」ともに、同時にそれは人間自身が必然的に入り結ぶ（その意志に依存しない）特定の社会的生産関係においてなされる過程であつて——それ自身、自己の自然的面（契機）と社会的面（契機）との生ける統一の実現過程である。<sup>30)</sup>

後述するように、『技術論』におけるような労働手段をもつば唯物論的に解釈しようという姿勢から、一九四〇年代の相川は離れていくが、しかしこうした自然的契機と社会的契機の両輪から技術をとらえるという姿勢は、山田と同様、相川は保ち続けることになる。

### 三二 唯物論を離れて——精神性の導入

さて、相川が三年ほどの文筆活動上の沈黙期間を経て「復活」<sup>31)</sup>して間もないころに刊行した、『現代技術論』（一九四〇年四月刊行）を見よう。同書においては、先行する関連文献を検討している箇所があるが、そこで三木清とともに注目されているのが三枝博音であり、技術論分野の大先輩というべきこの論者の手になる「日本技術史覚書」を挙げつつ、相川は、技術の中に精神文化を読み込もうとする三枝の方向性をかなり評価している。技術のいわば文化的な概念への着目について、その積極的な側面を相川は次のように述べた。「我々を捉えている技術を労働手段の体系とみるある固定的な概念化の危険から、ある可動的な方向を導き出すために、自然と文化の相関的發展への一般概念へと技術を解き放とうとしているのであるか」<sup>32)</sup>。すなわち、かつて相川自身が属していた唯物論研究会のようなマルクス主義サークルの立場からは一步踏み出し、文

化というモメントを導入する試みに対して、共感を示している。相川は、三枝の立場をカント的観照的なそれとみなし、それに対して「ヘーゲルの実践的示唆へと進めねばならないようにも思えなくもない」として留保をつけてはいるものの、労働手段体系説があまりに固定化されて解釈されがちであることを意識し、三枝にある点で傲おうとしているようである。

また、社会生活という切り口から技術の「国民的」性格を敷衍して論じる箇所を、『現代技術論』より一年ほどのち（一九四二年年初）に刊行された『技術論入門』に見ることができ。この書物の冒頭で、なぜ技術を取り上げるかを論じるにあたって相川がまず説くのは、「生活あるところつねに技術があり」、それゆえ「技術は生活あつての技術」であり、生活の中で生きなければならぬものが技術である、ということであった。<sup>33</sup>そして、生活の中で精神的なものと技術的なものが背反分裂している場合が多く、この統一と技術的な実現こそが目指されることだといふ。<sup>34</sup>いわゆる生活科学論が一般的認知を受け始めた当時の時流に呼応した記述といえるが、精神的なるものと物質的なるものとの統一という契機は戦時中の相川の技術論に通底する問題意識でもあった。

### 三三 社会的なるものと国家的なるもの

引き続き『技術論入門』を読んでいこう。生活論を引き継いで、技術の社会性ひいては国家との結びつきが論じられる。

生活が根底的に社会的生活である以上技術も社会的であり、この社会的技術はあます處なく社会生活的目的に規定されねばならぬ。当今の用語によれば根底から協同的（ゲマインシャフト）乃至は協同体的（ゲマインシャフト）でなければならぬ。われわれの生活は具体的には国民生活であり国民生活共、同体でなければならぬ。われわれは日本民族の発展のもとに持続的に育成されてきた国民共、同体の成員であり、かかる国家意識——その神髄は無比無欠の国体観念である——に貫かれた国民的生活意識を形成し、独特の言語をもち、東亜的な生活圏に立つ独特の技術を有ち、かくて独特の国民共同体をなして生活してきたのである。<sup>35</sup>

このように述べた相川は、続けて、「国民的技術は国民社会的意識と実践的に統一される」ものであり、国民的技術は国家のために「あます處なく動員され活用されねば」ならず、かつそれは「国家的意志に貫かれた国民的実践の中において」のみ生きるのだ、と説いた。<sup>37</sup>

ここで、技術が社会的なものであるということはともかくとして、国家の目的や国家的意志なる概念が出てくるのは唐突であり飛躍のようにも思える。相川はこの反論を予想し、続けて、「国家は国民の生活理念を可能に高度な形式において集中的に表現する自己目的な生命体」であって「至高の意志、絶対的イデーを体现する」ものだからと論じた。<sup>38</sup>

つまりこの時期の相川にとつては社会的なるものと国家的なるものは混然となるものであり、必然的に国家は超越的なるものであるという。こうした論議はいかにも国家主義的イデオロギーをなぞったものであり、当時の文脈でそのようにとらえられることを狙ったものには違いない。ただし、この議論がそれまでの、技術のもつ社会性の強調を受け継いだものであることは念頭に置かれてよい。相川にとつて国家と技術との関係は、あくまで、技術が社会的に規定されるものであることを前提としてのものであり、国家的精神がいかなるものであるべきかが先に想定されてあるべき技術のあり方が模索されているわけではないことはおさえておかねばならないだろう。

かくして相川は、本稿二節でみたような議論へと到着した。生活文化・国民文化とその意識、精神と物質との統合といった前提は、『産業技術』に至つて技術の国民性へと結びつけられ、「純粹科学」の応用としてではない相のもとで技術をとらえようとする論の中に導入させられていく。

## むすび

山田と相川という元来マルクス主義者だった者たちの、一九四〇年代の科学論・技術論を検討してきた。両者ともに、科学ないし技術が持つ民族性や地域特殊性を強調しており、それはまさに日本独自の科学や技術という概念をうちたてようとする当時の思想的統制の方向に親和的な議論であった。

しかし、彼らの議論は、科学的営為には本質的な精神的認識的な心構えが必要とされる、そしてその心構えこそ日本独自なものである、といった橋田のような日本科学論とは大いにその理路を異にしている。元来マルクス主義者であった者として、両者とも、技術とは自然的契機によつてのみ規定されるものではなく、そこに社会的契機が導入されること、このことをほとんど自明の理としてとらえていた。一九四〇年代以降、相川は技術のもつ文化的側面へ着目するなどし、従来の唯物論的に過ぎた技術規定から離れようとはしている。しかし、精神的側面への視座が導入され精神と物質の止揚のもとに技術がとらえられるようになったといつても、なるほど、相川にあつては社会生活の目的や国民生活、山田にあつては民族性の契機という従来なかつた概念が導入されてはいるものの、科学や技術は社会的なものに規定されるものであるとの基本的立場は崩されていない。

科学的営為の被社会的規定に関する相川の議論もまた、この立場を補強するものとなっている。彼にあつては、科学的認識があつて科学的営為があり、その応用として技術があるのではなく、むしろ、技術があつてはじめて科学は産業と結び付けられる現実的なものになるのであり（科学的認識は技術・産業をもたらすかどうかで言えば、可能的なものにとどまる）、また、そもそも科学的認識対象といえども生の自然ではなく、すでに歴史的に形づくられてきたものとされる。

つまり、橋田らのいう科学の地域特殊性が、日本的な精神を基盤においた結果として取得されるものだとすれば、相川や

山田にあつては、技術ひいては科学の特殊性は、まさにこれらの當為が社会的歴史的なものによつて規定されているからこそ担保されているものであつた。橋田らの科学論が基底からの上昇型といえらば、彼らの議論は生産から技術へ、そして科学へ、という下降型の理路をたどっている。そして、こうした議論の類型そのものは元来マルクス主義者であつた彼らの従来の典型的議論に見られたものであり、山田や相川が民族や国家、国民といった当時のイデオロギー装置を導入しているとは言つても、彼らの科学論・技術論の基層は転向の結果として生まれたものではなかつたのである。

註

- (1) 中村静治「新版・技術論論争史」(創風社、一九九五年)・嶋啓「技術論論争」(ミネルヴァ書房、一九七七年)。
- (2) 渡辺雅男「技術論の反省」『一橋大学研究年報 社会学研究』二四号(一九八六年)、一六七―二三四頁。
- (3) たとえば、村田純一「技術の哲学」(岩波書店、二〇〇九年)、一八三―一八五頁・柴田清「技術とは何か」藤垣裕子ほか編『科学技術社会論とは何か』(東京大学出版会、二〇二〇年)、五六―五八頁。
- (4) Aaron Moore, *Constructing East Asia: Technology, Ideology and Empire in Japan's Maritime Era 1931-1945* (California: Stanford University Press, 2013). (邦訳:アロン・モア(塚原東吾ほか訳)『大東亜』を建設する―帝国日本の技術とイデオロギー(人文書院、二〇一九年)。
- (5) 金山浩司「実践的生産過程での媒介としての技術…一九四〇年代初頭における相川春喜(一九〇九―一九五三)の理論的諸著作」『科学史研究』二七三号(二〇一五年)、一七―三二頁。
- (6) なお、引用文中の旧仮名遣いは現行仮名遣いに、旧字体は現当用漢字に改めた。引用文中の強調はすべて原文のものである。
- (7) 岡本拓司「戦う帝国の科学論…日本精神と科学の接合」坂野徹／塚原東吾編『帝国日本の科学思想史』(勁草書房、二〇一八年)、二一―八八頁。
- (8) 作田は一九三〇年代半ばの著書『国民科学の成立』において、普遍性を志向しない学問、従来のブルジョア的個人主義に基づく

学問やマルクス主義者の言う階級科学としての学問のいずれをも否定した「国民科学」概念を打ち出した。これについての簡便な紹介としては以下を参照。Hiromi Mizuno, *Science for the Empire: Scientific Nationalism in Modern Japan* (California: Stanford University Press, 2009), 98-99.

- (9) 「山田坂仁略年譜」山田坂仁(いいたも) 編・解説 『認識論と技術論』(こぶし書房、一九九六年)、二八五頁。
- (10) 『科学主義工業』は、科学者であり技術行政官とでもいうべき人物であった大河内正敏のプロデュースのもと刊行された、科学技術振興のための各種ルポ、論説を大量に掲載していた月刊雑誌であった。
- (11) 山田坂仁「科学の民族的性格」『科学主義工業』(一九四三年第一号)、一四八頁。
- (12) 山田「科学の民族的性格」、一五三頁。
- (13) 山田「科学の民族的性格」、一五四頁。
- (14) 山田「科学の階級制について」(初出は一九四九年)『認識論と技術論』所収、二二四―二五七頁。
- (15) 現時点ではこのことを敷衍して述べることができないが、本稿の相川春喜に関する節において再びとりあげることとする。
- (16) 相川春喜「序文」『産業技術』(白揚社、一九四二年)、三頁。
- (17) 相川「産業技術」、四頁。
- (18) 相川「産業技術」、五頁。
- (19) 相川「産業技術」、一六頁。
- (20) 相川「産業技術」、一七頁。
- (21) 相川「産業技術」、二二―二四頁。
- (22) 相川「産業技術」、二九―三〇頁。
- (23) 相川春喜「技術的合理化の国民的性格」『科学主義工業』(一九四二年七号)、二三頁。
- (24) 相川「技術的合理化の国民的性格」、二四―二五頁。
- (25) 武谷はこの時点では意識適用説を展開する論考を発表していないが、口頭で相川と議論していた可能性が高い。中村静治の戦後の聞き取り調査によると、一九四一年の春ごろ、武谷と相川は東京の喫茶店で討論したことがあったらしい。中村『新版・技術

論争史」、九〇頁。

(26) 嶋『技術論論争』、三二―五九頁。

(27) 『技術論』は唯物論全書シリーズの一環として三笠書房より公刊された。相川にこの書の執筆を慫慂したのは岡邦雄(二八九〇―

一九七二)であり、岡の回想によると、著者相川の毎夜の難行の末書き上げられた労作だったという。岡邦雄「技術論の功罪」

『相川春喜小伝』(中央公論事業出版、一九七九年)、七七頁。

(28) 相川春喜『技術論』(三笠書房、一九三六年)、八四頁。

(29) 相川『技術論』、八九―九〇頁。

(30) 相川『技術論』、九四頁。

(31) 一九三六年、相川はコムアカデミア事件に連座する形で逮捕されていた。

(32) 相川『現代技術論』、三三頁。

(33) 相川『技術論入門』、八頁。

(34) 相川『技術論入門』、一三―一四頁。

(35) 生活科学論についてはさしあたり今井隆太「国民科学」における近代科学批判——社会科学の文化研究『ソシオサイエンス』

vol.5(一九九九年三月)、二四七―二六二頁を参照のこと。

(36) 相川『技術論入門』、五九頁。

(37) 相川『技術論入門』、六〇頁。

(38) 相川『技術論入門』、六一頁。

(九州大学基幹教育院／共創学部・准教授)